

反省学的人間社会学の可能性とその基礎理論

自己準拠的システムに関する問題提起

金蘭短期大学 三石博行

1、課題 反省機能を持つシステム概念の確立

世界規模で深刻化する環境問題、拡大する科学技術南北問題、益々進化する高度情報社会、ポスト工業社会、進歩主義の終結、等々。これらの問題提起を解決する糸口を現代人間社会学は持っているか。その糸口とは何か。20 世紀後半になって展開したシステム論や社会システム論の課題から、その科学史を前提にして、システム論の中で現在問われている自己参照や自己準拠の概念について考察する。それをここでは、反省機能を持つシステム概念と定義する。

2、機能主義・パーソンズモデルの問題点

システム論を点検するとき批判的に乗り越えなければならない社会認識論として意識哲学や主客二元論がある。意識哲学批判はすでにパーソンズにおいても「社会システムの構造と変化」の中でパーソナリティ・システムに関する言及の形をとってなされているが、それらは自己言及的な課題を含まないために不十分なものを感じる。

つまり、パーソンズの考え方では、文化システムを構成する集合体の基底構造に無意識化された社会文化の要素を持ってきているのだが、従来のシステム論的分析方法に留まるため、それらの要素分析は還元主義的になり、彼の社会システム論は、結局、要素結合主義、コネクショニズムによって展開されることになる。そのため構成要素群の未定を前提に「考えられる」それらの要素が、いつのまにか限定要素になって表現されてしまうのである。

この問題は対象認識の問題に終わることはない、つまり未定を前提としていた「考えられる」システムの要素を前提にする観察者の課題も認識論的に問われている。対象の限定は、認識主体の限定の在り方として登場していることを知る必要がある。つまり、限定化された観察対象の登場によって、観察者の観察空間が絶対化される。それを二元論的には客観的要素と読んでいる。

表象が観察者の欲望や精神構造が現われていることをすでにフロイトは代表表象概念で説明したが、対象と主体が切り離された時、すでにその限りにおいて文化システムの分析の前提条件とも言うべき、

文化的観念形態の分析は不可能になっていることに気付く必要がある。

極論すれば、パーソンズの社会システム論では、自らの理論を援用する科学理論の点検を可能にする方法論は問題にされない。ある科学的と呼ばれる時代的文化的な観念形態を相対化することも、批判的に点検することもできないのではなからうか。

3、ルーマンの自己準拠的システム論について

ルーマンが課題にしたように、意識や人間の主体に関する分析も科学が課題にする限り、例えば大脳生理学、認知科学、社会心理学、精神分析等々の対象のように、それらのある科学的な対象としなければならない。反省機能とは自己の在り方を他者性をもって観測することであると考えると、反省機能を持つシステムとは「あるシステムについて他のシステムによる描写」という難解なパラドックスを抱え込んでいる。この自己準拠のパラドックス問題を前提にしてシステムに内在する「複合性」を課題にしてみよう。

ルーマンによると、自己とは「自己自身で目指している行為や自己自身を含有する集合」つまり意識的にしろ無意識的にしろ自己の行為の主体として登場するものである。準拠とは「そうして自己の存立の基盤となっているオペレーションのこと」である。つまり、自己準拠はシステムの中に所謂「他者性」を含むことによってそのシステムが一種のパラドックスになること。そのパラドックスによって生じるシステム内部の回帰運動を意味する。また、フィードバックはシステムのプログラムに即してその合目的性を満たすためにシステム内部に組み込まれたデータの再解釈プロセスである。機能主義的な考えではフィードバックを反省機能と考える傾向があるため、ここでは自己準拠とフィードバックのそれぞれの概念を分けてみた。

また、システムの再生産過程はそのシステムの内部で規定された諸要素の類型に依存しながらも、外部の要素を取り入れそれらを帰納論理プログラムしなければならない。するとそこで「システムとその環境の差異」を導き出す自己観察というシステムのコントロール機能が問題になる。するとルーマンの自己準拠的システムは対象認識する主体認識の在り

方に関する観測機能を持つことを前提に成り立っていると思われる。

4、認知科学における双参照モデル

認知科学、人工知能や認知システム論等、工学研究の中で、制御理論以来、より人間的な思惟や行動を可能にする機械の開発は進んでいる。しかし、反省機能もつ機械に関しては現在を可能にするモデルの研究反省機能の課題は取り上げられている。

塩瀬・榎木グループの研究で、レヴィナスの概念を援用して、反省機能を時間概念の二重性、つまり過去から現在に向かって経験的に積み重なりゆく自己と現在から未来にかけて発生する未知なる自己、を仮定して、行為基準の妥当性を他者との相互作用で確認する他者参照系と自己自身に求める自己参照系との二つの系からなる双参照系をさらに仮定して、反省機能を考えた。この反省機能の概念は、個体内部に形成される独自のものではなく、個体が集団への参加、社会的学習過程を通じて確立する。つまり個体と環境の相互限定的関係から反省機能が形成するのであると考えられている。この仮定を満たす目玉ジャクシの工学的モデルを想定して計算機実験を行っている。

しかし、ここでもパーソンズモデルからルーマンモデルに変換した時に確認した認識論的な課題が問題になる。つまり、反省行為を進める反省主体は、ここでもその意識や主体を自己参照系とか他者参照系という具合に対象化して考えなければならない。

この双参照系も分裂した自己ではなく、あるところで統一的に機能している自己である。過去の反省の記憶も現在に解釈されてしまう限り、ふたつの時間的な違いをそのまま参照系のカテゴリーの違いにすることが出来るだろうか。自己とは意識的にしろ無意識的にしろ自己の行為の主体そのものである。

それゆえに反省とは、そうした自己の存立から逃れられないし、それを基盤にして成り立つ行為である。そのため、この工学的アプローチに対して反省機能がそこで成立すると楽観出来ない。そのことは言い換えると、ルーマンが言うようにシステム内部に組み込まれたデータの再解釈プロセスとしてのフィードバックとしてシステムを構築するのではなく、システムそのもののパラダイムチェンジを示す、つまり内部プログラムの自己組織系を必要とするシステムが要求されることになる。

5、人間社会的反省学的システムの可能性

対象認識を通じて自己認識は可能性か。社会文化の構造を通じ自己の在り方が課題になるためには、それらの知識は単に対象分析の技術ではありえないはずだ。自己分析を前提にして成り立つ人間学として精神分析がある。それは認知科学とは異なる。そこには臨床的な課題が含まれている。つまり、知ることは現実の自己を変える作業でなければならない。それは主体を認識する哲学的な知を意味する。

また、自己認識を通じて対象認識の可能性とは何を意味するのだろうか。自己の感情や感覚を通じてその環境について理解するためには、自己とはある科学的視点で対象化されていなければならない。つまり、自己とは生物として社会的文化的存在として対象化されてはじめて自己感覚を単なる自分個人のものでなく「生み出されたもの」として理解することが出来る。

これらの二つの公理が、相互に依存しあう時、ルーマンの自己準拠の概念が復活する。それは自己認識と呼ばれるシステムの中に「他者性」を含むことを意味し、その一種のパラドックスによってシステムが稼働していることを意味する。つまり、システムとはこの回帰運動を意味することになる。

参考文献

- タルコット・パーソンズ 倉田和四生訳『社会システムの構造と変化』東京、創文社
 タルコット・パーソンズ 丸山哲央訳『文化システム論』東京、ミネルバ書房
 ニコラス・ルーマン 佐藤勉監訳『社会システム論 上下』東京、恒星社厚生閣
 塩瀬隆之・岡田美智男・榎木哲夫・片井修 「双参照モデルにおける社会性の創発機構」『認知科学』Vol.6、No.1、March.1999
 E. レヴィナス 原田住彦訳『時間と他者』東京、法政大学出版 Levinas E. *Le temps et l'autre* Paris PUF

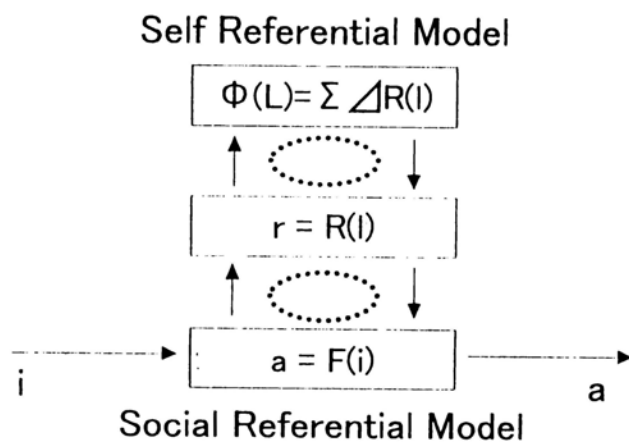
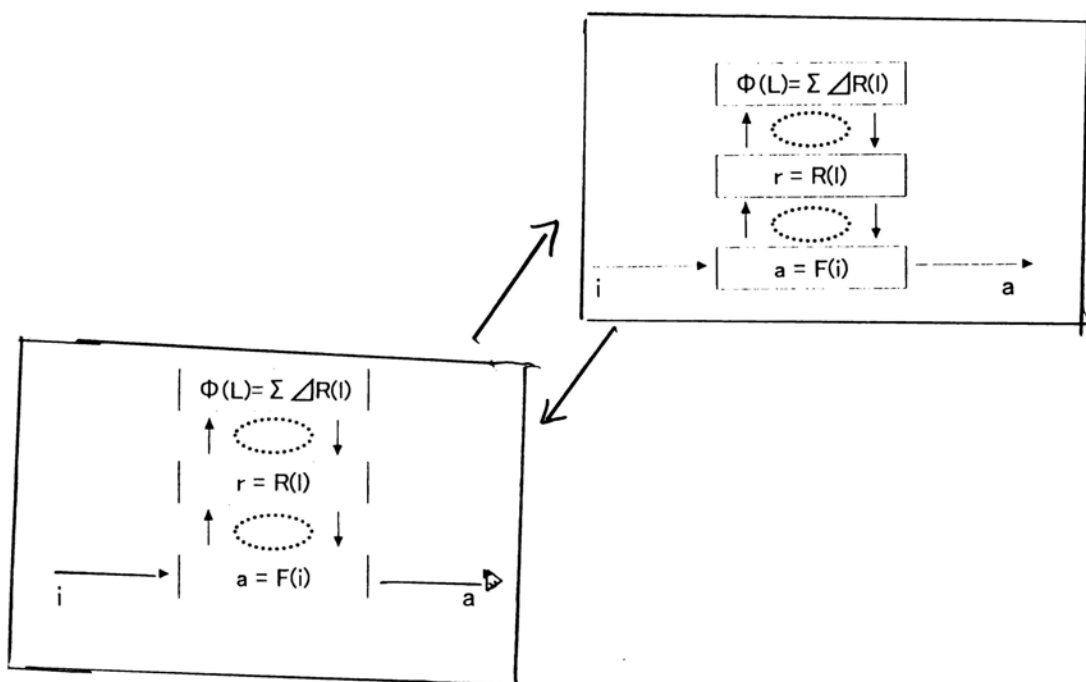
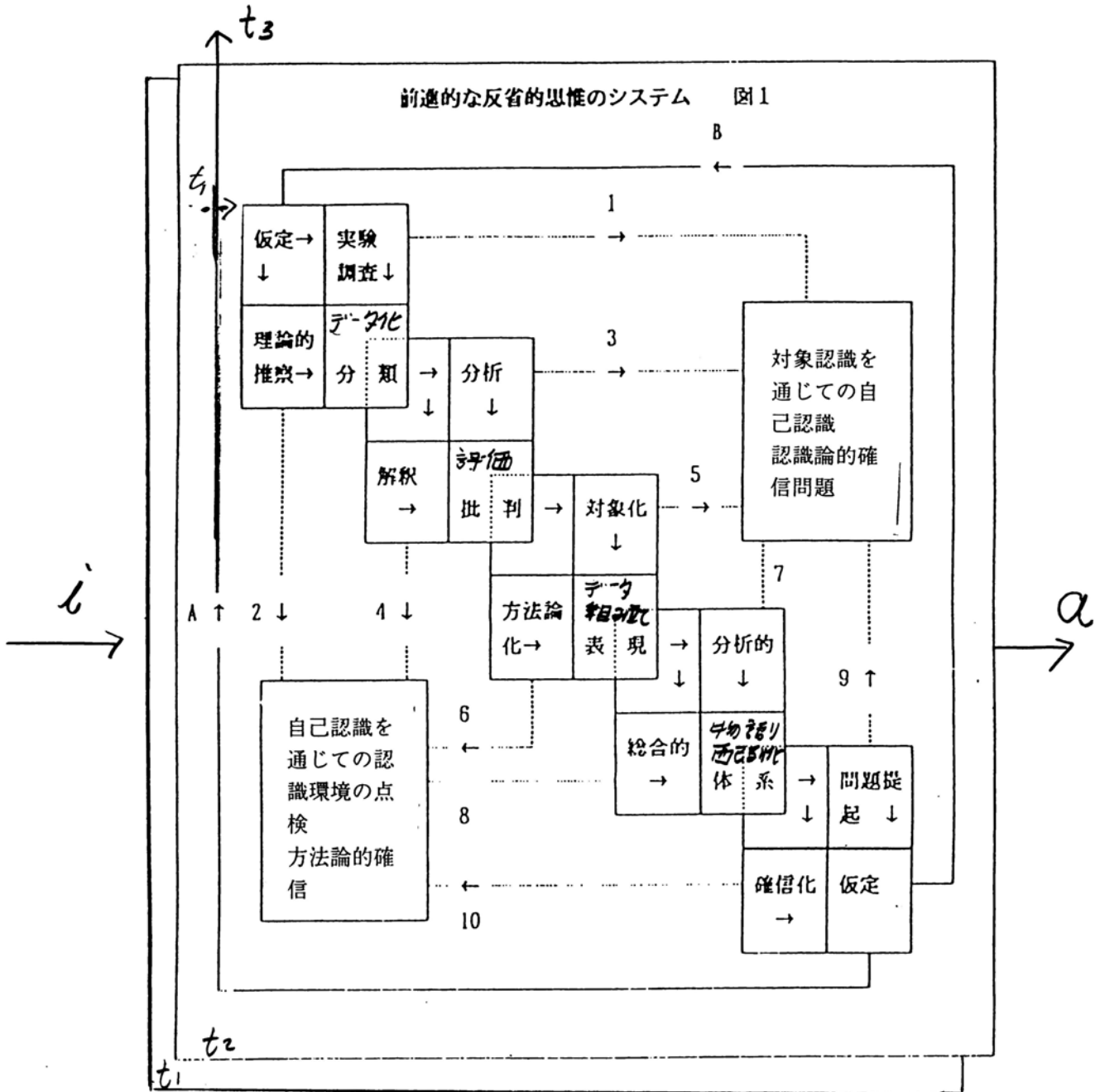


図2 双参照モデルのアーキテクチャ

塩瀬隆之・岡田美智男・樫木哲夫・片井修 「双参照モデルにおける社会性の創発機構」『認知科学』Vol.6、
No.1、March.1999



前進的な反省的思惟のシステム 図1



H. MITSUISHI 1987.

$i = \mathcal{L}(I_1)$
 $I_2 = \mathcal{L}(a)$

